地域協働ニュース　2020年11月30日(月)第11号

「2030SDGs」カードゲーム体験

さばえ SDGs 推進センターで、教員も探究！

11月25日(水)夜、今年９月めがね会館に開所した「さばえ SDGs 推進センター」で本校教員の９名が３時間におよぶ SDGs 勉強会をしました。「生徒とともに探究する先生方に SDGs ついて、またその理念に賛同し取り組む鯖江市をはじめとしたさまざまな団体について知る機会を」と今回センターの方々が特別に学ぶ機会を提供してくださいました。コロナ感染拡大防止に配慮し、体験予定人数は大幅に縮小されましたが、「2030 SDGs」の公認ファシリテーター資格をもつ楳原(うめはら)秀典さん（エコネットさばえ）を講師に迎え、鯖江市役所の方々と一緒に勉強しました。

アクションが世界を変える

「2030　SDGs」は、SDGs の 17 の目標を達成するために、現在から 2030 年までの道のりを体験するゲームです。与えられたお金と時間を使ってプロジェクトを行うことで、最終的にゴールを達成するというものです。さまざまな価値観や違う目標をもつ人がいる世界で、「自分たちのゴール」と「世界のゴール」を目指します。ホワイトボードには３色のマグネットが３つずつ貼り付けられ、そのときの世界の状況を表しています。青は経済、緑は環境、黄は社会を意味します。各プロジェクトは、実行できる世界の状況が決まっており、実行すると３色で表される世界の状況メーターも変化します。

前半は、自分のチームのゴールを達成するためにどのグループも必死な様子でした。ホワイトボードは青いマグネットがずらりと並び、環境や社会のマグネットが１つもない瞬間もありました。前半が終わった時点で、経済は良好だが、環境と社会は一層の努力を要するという状況でした。また、自分たちのゴールを達成できたチームは 10 チーム中７チームでした。

ファシリテーターの楳原さんから、私たちのプロジェクトによって作られた 2025 年の世界の状況について説明があり、後半が始まりました。最終的に私たちの作った 2030 年の世界は SDGs 達成率１００％の良好な世界にできたようです。しかし初めて会う方が多い状況だったら、こんなにスムーズにいかなかったかもしれません。

体験を通して感じたこと

ゲームの後は振り返りをしました。自分たちのゴールを達成した後ようやくまわり（環境や社会など）を見られるようになったという気づきや、世界状況の視覚化の大切さ、人との関わりでゴールを達成できたという感想が出されました。そして、楳原さんからゲームと現実社会のつながりや、SDGs が大切にしていること、環境活動についての話を聞きました。

このゲームに参加して SDGs の認識を深められただけでなく、新しい出会いもありました。未来に対し、多くの人間が真剣に社会問題に向き合おうとし、具体的な活動で少しずつ世界の何かを変えているということを学びました。今から私にできること・・・それを考えられた充実した３時間でした。さばえ SDGs 推進センターの方々、お声がけいただきありがとうございました。

めがね会館を出ると、美しい星空が見え、明日からもがんばろうと気持ちを新たにしました。

地域協働ニュース　2020年12月9日(水)第12号

１学年探究科　研究手法を学ぶ

12 月 4 日（金）総合的な探究の時間に、１学年探究科では仁愛大学より西出和彦教授、江南健志准教授に講師としてお越しいただきました。今回は文系講座と理系講座に分かれ、課題研究における研究手法について学びました。

理系：西出先生　“先行研究を徹底的に調べる”

理系生徒 22 名は視聴覚室で、西出先生の講義を受けました。はじめに、前回（11 月 20 日）の講義の内容を振り返り、グループで出し合った「問い」が良い「問い」なのかを考えました。次に、

研究手法は主に４つあり、
①実験・観察　②調査
③文献研究（文献レビュー）　④事例研究（ケーススタディ）である

ということを知りました。そして、学問領域（自然科学や人文・社会科学）によって研究手法には特徴があり、研究手法を手に入れるためには、先行研究を徹底的に調べ（調べ学習）、目的に合った手法を探すことが大切であると教わりました。また、２年次から取り組む課題研究の過程（課題設定→先行研究→仮説立案→研究計画→観察・実験→結果の考察→発表・論文）とゴール（レポートの骨格）を確認しました。中でも特に「課題設定」が最も重要かつ大変なものであり、先行研究を批判的にじっくりと時間をかけて読み解き、「問い」を手に負える小さなものに絞っていくことの大切さを学びました。

文系：江南先生　“社会科学の考え方”

文系生徒 16 名は１－１教室で、江南先生の「社会科学の考え方」の講義を受けました。江南先生は地域社会学や環境社会学が専門で、フィールドワークによる調査をされています。自己紹介の後、理系（自然科学）と文系（社会科学・人文科学）の考え方や研究手法について、社会学以外にもさまざまな学問について話をされましたが、実は基本的に違いはないということでした。しかし研究上のアプローチに違いがあり、「物事をどう捉えるか」によって変わってくるところが文系の研究の面白さであり難しさでもあるということでした。そして、具体的な場面を想定して『実証主義』と『解釈主義』について説明してくださいました。対象者との関係性が調査では重要で、調査結果の捉え方にも関わってくるという話でした。少し難しい内容でしたが、生徒たちは真剣に聴き、先生からの質問には緊張しながらもしっかり答えていました。

生徒の感想

★先行研究を批判的に見ていくことで、課題研究のテーマや研究手法のヒントを見つける手がかりになるということが分かりました。

★文系は、「解釈主義」といって質的な手法が使え、人の価値観や考え方によって研究結果が変わり、一方で理系は、「実証主義」であるため、量的な手法によって結果が一つに導き出されることが分かりました。

★研究手法を探すためには、先行研究を徹底的に調べることが大切であることが分かりました。先行研究における実験方法を活かして、自ら考えた工夫した実験を行えるように、考える力を育んでいきたいです。

★文系の研究とは、物理的なものではなく、人間社会のような目に見えない事象に対する課題が多いことが分かりました。そのため、人間の感情と、相手との信頼関係を考慮することが大切だと感じました。

★良い研究をするためには、ある程度、結果までの道筋が分かるような課題設定が大切だと実感しました。また、レポートを作成する際には、実験結果だけでなく、予想や考察、今後の課題などもまとめることが必要であることが分かりました。

地域協働ニュース　2020年12月18日(金)第13号

探究科「2030 SDGs」カードゲーム体験

自分たちの行動が世界を変えていく･･･

12 月 14 日(月)午前、総合的な探究の学習の特別授業として、探究科生徒 38 名が SDGs について学習しました。「エコネットさばえ」の楳原秀典さんをファシリテーターとしてお迎えし、カードゲーム「2030 SDGs」の体験を通して、SDGs と日々の生活とのつながりについて学び、明日からできる一歩について考える機会をもちました。

探究科がつくった 2030 年の世界

今回の「2030　SDGs」では 13 チームに分かれ、それぞれのチームが違う価値観や達成目標をもって、持っているお金と時間を使ってプロジェクトを行い「自分のゴール」と「世界のゴール」の達成を目指しました。架空世界の経済・環境・社会の状況を表す３色のマグネットが、各チームが実行していくプロジェクトによって、刻一刻と変わっていきます。前半 9 分間、後半 12 分間でのゲームで、生徒たちはどのような 2030 年をつくりあげたのでしょうか？

前半を終えた時点で、経済１７・環境２・社会７。楳原さんから「経済活動は絶好調！でも環境破壊が進んで、災害もお決まりのイベントになっちゃっているかもしれない。社会は今後よくなる兆しが見られるものの、まだ差別で傷ついている人がいる状態だね」という解説をいただきました。自分のゴールを達成できたチームも 3 チームだけでした。

後半に入ると、チーム同士のやりとりが増えました。お金やプロジェクトのやりとりで積極的に交渉する姿が増えました。後半の 12 分間を終え、経済は１７⇒２２、環境は２⇒１０、社会７⇒１１になりました。自分のゴールを達成できたチームも 11 チームになりました。生徒がつくりあげた 2030 年の世界における SDGs 達成率はなんと１００％！良好な世界にできたようです。

生徒の感想

★今日のＳＤＧｓの学習を通して、貧困問題や環境問題など、地球のために少しでもできることを考えながら生活していきたいです。

★ＳＤＧｓの取組みについて、他人事と考えるのではなく、私たちの子孫により良い世界を残していくために、小さな活動から参加してみたいと思いました。

★世界はつながっているので、私たちにできることは沢山あると思います。例えば、フェアトレード商品を買うようにすることで、発展途上国を助けたいです。

★食品ロスを減らすために、その日のうちに食べられるものは賞味期限が近いものを買うなど、小さなことから大きなことにつなげたいと思いました。

★ゴミ拾いやゴミの分別、木を植えるプロジェクトに参加するなど、小さな取組みを積み重ねていくことで、世界に良い影響を与えていきたいです。

★現代社会では、経済が発展し過ぎて環境や社会の状態があまり良くないので、経済・環境・社会のバランスを保つ必要があると感じました。

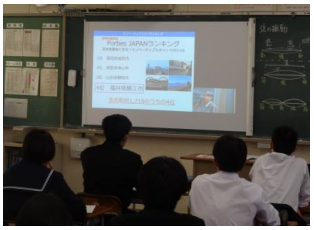
地域協働ニュース　2021年2月15日(月)第14号

前市長と語る会　～鯖江市の魅力発見～

鯖江で学ぶことに誇りを

2月12日(金)7限目、1年生総合的な探究の時間に「前市長と語る会」を開きました。牧野百男氏は、昨年10月まで16年間鯖江市長として活躍され、現在は国連の友Asia - Pacific特別顧問としてご活躍中です。今回、新年度から鯖江市をテーマとした探究活動に取り組む1年生に向けて鯖江市への理解を深めるきっかけにと、本校卒業生でもある牧野氏は市長時代に行った取組みなどを紹介してくださいました。コロナ感染防止に配慮し、視聴覚室には各クラスからの直接聴講希望者約30名が集まり、その他の生徒は教室でリモート視聴しました。

日本を面白くするイノベーティブシティ第４位のまち



牧野氏はまず、世界的経済誌「Forbes JAPAN」に掲載されたイノベーティブシティランキングを紹介し、鯖江市が全市町村1,718のうちの第4位であることを教えてくださいました。そして、鯖江の名産品や自然環境、産業について説明され、世界に誇れる技術力のあるまちだとおっしゃいました。また、学生連携、市民主役、IT・オープンデータの先進地としてのさまざまな取組みのなかで、とくにSDGｓ5番の『ジェンダー平等実現』に向けた市の取組みについて語っていただきました。

講演を聴いて、1組の山田煌桜さんは「ジェンダー平等で気をつけていたこと」について質問しました。牧野氏は、日本の昔の男社会で培ったものを払拭していくのは難しいとしながらも、「男女が互いに尊重し、互いに分かり合う大切さを、諦めずに少しずつ意識されていくよう進めていくこと」だとお話しされました。そして、ものづくりを支える女性の力をもっともっと生かし、「鯖江モデル」として国内外に発信していってほしいとのエールをいただきました。

生徒の感想

★鯖江市に住んでいるのに知らないことばかりでした。鯖江市は世界との関わりがとてもあり、いろいろなボランティアもあったので、参加してみたいと思いました。

★ジェンダー平等というのはとても難しいと思いますが、牧野さんの取組みで女性のチャンスが広がっていることを知りました。鯖江から全国へ活動を広めていけたらいいなと思いました。

★眼鏡産業が活発なことは知っていたけれど、漆器産業や繊維産業も盛んだとは知りませんでした。また、たくさんの人が楽しめる行事がありました。女性中心のまちづくりもすごいなと思いました。

地域との協働による高等学校教育改革推進事業　最終年度にむけて

放課後には教員対象にも同様に講演され、全日制・定時制の教員が約1時間聴講しました。その場では、学校再編によって鯖江市では唯一の高校になった母校鯖江高校で働く教員に向けて、「もっと地域を連携して元気な鯖江を発信していってほしい」という願いを語り、「探究科や専門コースができたことで注目・期待されている状況を卒業生として誇らしく思っている」と述べられました。

文部科学省による「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の令和元年度指定校としての取組みもあと1年となりました。「オールＳＡＢＡＥ」の構築のもと、持続可能な地域社会を形成する市民の育成に、新年度はコロナに負けずに、教職員一丸となってより一層進めていきたいと考えています。

地域協働ニュース　2021年2月16日(火)第15号

古典芸能を学ぶ　～人形浄瑠璃体験～

実際に触れて演じて、魅力を感じる

２月10日(水)6限目、選択音楽を受講する２年生が人形浄瑠璃について学習しました。「近松座」から大橋國利さんをはじめ７名をお招きしました。「近松座」は平成17年に鯖江市の有志の方々が立ち上げた人形浄瑠璃座です。元禄文化を築いた近松門左衛門は、幼いころ鯖江に住んでいたという史実があり、文楽のまち鯖江として、古典芸能を多くの人に知っていただきたいと現在も活動をつづけていらっしゃいます。コロナ禍と大雪の影響もあり実施が危ぶまれましたが、昨年に引き続き、今年もご協力いただくことができました。

呼吸を合わせる

人形浄瑠璃は、太夫・三味線・人形が一体となった総合芸術です。太夫と三味線は、どちらが指揮者というわけでもなく、お互いの呼吸を合わせて進めていきます。

太夫役は４名の男子生徒。情景や感情を三味線の音色に合わせて、情感たっぷりに語っていきます。台本には音階や強弱などの微妙な違いが記号で書き込まれています。記号の１つである「サワリ」は、一番心をつかまれる聴かせどころを指していて、現代語にも残っています。太夫担当の生徒は、南和彦さんからさまざまな資料をいただきながら熱心に練習し、一人でも大きな声で堂々と語れるまでになりました。

三味線担当は６名の生徒。初めて触れた三味線に少しびくびくしながらも、栗山祐子さんから約20分間の指導をうけ、太夫の語りにタイミングを合わせて撥で力強くつま弾けるようになりました。

人形遣いの担当の生徒は、３人グループに別れ順番に人形操作を学びました。人形は３人で１体を動かします。３人の息を合わせて、人間が動いているように見せなければなりません。胴部を支え、頭部と右手を操作する人。右手で人形の左手の操作する人。かがんだ姿勢で足を操作する人。生きているように操作できるまでには相当な練習が必要だと感じました。また、人形の構造の説明を教えていただき、指やまぶたの動きの細かさに驚く生徒もいました。

今後、各担当で練習を重ね、６月に成果発表会をする予定です。

文楽を映像で見て知っているというレベルでなく、実際に声に出し、人形や三味線の重さを実感することを通じて、江戸時代の人々の生活をより深く理解することにつながっていきそうです。また、江戸文化への発展学習や、古文読解や人間の動きの研究、英語版の台本創作など、教科を横断した学習の可能性を感じることができた授業でした。

生徒の感想

★なかなか体験できない三味線を体験することができてとても楽しかったです。

★中学校の時、人形遣いの体験をしたことがありましたが、三味線は初めてでした。新しいことに挑戦できて楽しかったです。

★三味線の体験をしました。普段はギターを弾いているので、ある程度はできるかと思いましたが、バイオリンのようにフレットが打っていないので正確な音を探すのがとても難しかったです。

★太夫は声だけで役を表現しなくてはならなく、声の出し方や話し方、長さなど、さまざまな工夫が必要であることが分かりました。練習を重ねて、よりよい表現ができるようになりたいです。発表会では緊張して早口にならないよう、ゆっくりと語れるように練習したいです。

地域協働ニュース　2021年2月22日(月)第16号

民族楽器にチャレンジ　at 鯖江高校

やってみよう！　民族音楽

２月 17 日(水)3 限目、選択音楽を受講する１年生が世界各地の民族楽器について学習しました。講師として、民族楽器収集家であり、「轟音」というアマチュア演奏集団の一員でもある森眞一郎さんをお招きしました。コロナ禍と大雪の影響もあり実施が危ぶまれましたが、昨年に引き続き、今年もご協力いただくことができました。

異文化理解と創作

まずは、20 種類を超す楽器に触れた後、楽器紹介と音の出し方について説明を聞きました。その後、２グループに分かれてそれぞれ別の創作活動に挑戦しました。一つのグループは、「楽器でおしゃべりをしてみよう」と「祈りを表現してみよう」という課題に取り組みました。おしゃべりする際には、他民族が言葉を使用せずに意思伝達に用いる楽器（バードコール、トーキングドラム、エクタール、クィーカ、モーニップ）のみで自分の好きなものを伝え合おうとしました。また、祈りを表現する活動では、金属製の楽器（オーシャンハープ、クロティール、シンキングボウル、アンティックシンバル、がもも、カウベル、ハピドラム）の中から好きなものを選び、静寂な雰囲気を表そうとしました。

もう一つのグループは、「物語にＢＧＭをつけよう」と「アンクロン合奏に挑戦してみよう」という課題に取り組みました。物語にＢＧＭをつける活動では、日ごろあまり耳にすることのない音色を用いて、朗読にＢＧＭを合わせました。この活動には、バードコール、カリンバ、サウンドホース、スプリングドラム、レインスティック、オーシャンドラム、ブルロアー、ウィンドバンドが用意されていました。アンクロン合奏では、インドネシアの民族楽器を使って「きらきら星」を演奏しました。

授業のまとめとして、森先生は次のような言葉を生徒たちに贈りました。

「世界には色んな楽器があることを知ってもらいたい。そして、ひとつのことができるようになるには、こつこつと練習する必要がある。これらのことを覚えておいてほしい。」

これまでに手にしたことのない多くの楽器に触れることができる興奮だけでなく、創作活動にも挑戦することができるとても楽しい雰囲気を感じる授業でした。

生徒の感想

★森さんが持ってきてくださった楽器はどれも初めて見るもので、見たり触ったりするのがとても新鮮で楽しかったです。その中からお気に入りの楽器を見つけることができてよかったです。

★教科書で見ていた楽器の他にも多くの種類の楽器があり、それらを見て触ってみることで、楽器を演奏することの難しさや楽しさを知ることができました。竹、木、鉄、水など身近にあるもので作られた楽器が多く、吹奏楽やオーケストラで使われているフルート、オーボエ、バイオリンなども元々は民族楽器のような感じだったのかなあと思いました。

★楽器で意思疎通をしている民族の人はすごいと思いました。他にも民族楽器を調べてみたいなと思いました。

★民族楽器は大きくて大胆な音が出るのだと思っていたので、やさしくてかわいらしい音を聴いたとき意外だなと思って面白かったです。ボウルをこすって音を出すシンキングボウルは、授業が終わってから挑戦しましたが、音を出すことができませんでした。森先生も５年かけて弾けるようになった楽器があるとお話しされていたので、根気強く練習することがとても大切だと思いました。